

笑い一念 その三

有富洋二

昭和の新興俳句も戦後の前衛俳句も伝統としての俳諧からは脱しようと考えていたであろうが、五七五の定型である限り、竹馬狂吟集から数えても「俳」の数百年の歴史はそのDNAを遺しているはずである。現在の俳句にして然り。そもそも俳句のアイデンティティは和歌的世界に対してのその独自性にある。

それにしても不思議なものだと思う。ほんの十七文字のこの俳句は長い年月の間、廃れることもなくどれだけ多くの人が情熱と時間を費やして今日に至ったことであろうか。

私と俳句の出会いは、今から約十年前の松山勤務時代に、ひよんなことから八木健会長の俳句イベントに参加したときである。そしてその後なんと一年間以上毎日欠かさず一日一句をメールで添削、ご指導をいただいた。ある日、主宰をされていた定例句会の席で、滑稽俳句協会の立ち上げについて熱くその構想を語られていた様子を思い出す。

さて、自分自身の俳句作りはどうか。俳句を娯楽として考えるか、文芸として考えるか。先ずここが分かれ道になるであろうが、正直なところ文芸の二文字を捨てたくはない。そして「笑い」はもっと外したくない。嘯み締めれば自然に滑稽の味が滲んでくるような句を作りたい。滑稽でありながら詩性を保ちたいという二兎を追うようなことは大変に難しいが、願望はそこにある。手垢のついた類句類想を避けるためにも、新鮮な実感のある発見に心掛けねばならない。前述のとおり一呼吸おいて常識的なものの捉え方を変えてみるのも滑稽の醍醐味である。いま俳句を作る上で大事

なことは独創性だ。クリエイティブな作業をするときには欠かせないものだからである。十七文字の観た目、観え方にも大いに関心があり、大袈裟に言えば句姿も美しくあればなお良い。使用する漢字、かなの選択枝はさまざまにある。そうして、目的ではなく滑稽の大いなる力を借りてその句のテーマを読む人に伝えられたらと願っているところである。残念ながらいざ実作となると能書きどおりにはいかないが、このように欲張って考えている人は私も含めて大勢居られるのではなかろうか。今のような複雑な社会になるほど笑いは必要なもの。私自身、まだまだ笑いに飢えているし、笑う努力も足りない。先人達が大切にしてきた滑稽のこころを大事にして、もっと「笑い」を体感していきたいものである。

〈以下、拙作〉

了はりかと思へば散らす花心
花あれば胸を張りたる昼の酒

参考「竹馬狂吟集」(新潮社)

「俳句の詩学・美学」(角川学芸出版)

(完)